関西自然保護機構会報 13 (2)：75，1992

巻頭言

「若草山の山焼き」に思う

菅沼孝之
（元奈良女子大学教授）

もう2年前のことになるが，見知らぬ男性から一通の書簡が舞い込んだ。結論のみを紹介すると「若草山の山焼きは自然破壊の暴挙であり，それを今まで放置していたのは官庁の手抜きで，すぐにでも廃止すべきだ。」という提言である。提言者が廃止を求める理由は，森林の三つの機能，すなわち，森林による大気の浄化機能，森林による水資源の保持機能，同様に森林による土砂流出防止機能を活かすためには，草原のままにおくのではなく，森林が最も効果を発揮するからというのである。それだけではなく，33 haもの草原を燃やすと，二酸化炭素の放出によって，地球の温暖化が進行すると心配している。

若草山は読んで字のとおり，ススキやシバの草原で覆われているが，これは，本来なら，お隣の春日山原始林のような森林であるべきはずで，これが年中行事化した山焼きによって群落の遷移が止まり，ススキあるいはシバを優占種とする遷移の途中相が継続するわけである。すなわち，山焼きという人為が加わるが，あとは放置して自然条件下で草原が維持されるので，こうした草原を半自然草原とよんでいる。

山の傾斜が急なところは踏む圧力がかかりにくいので，ススキが優占する群落になるし，傾斜がゆるやかな山頂部や山麓では踏圧がかかりやすいので，生長点が低いシバのような丈が低い草本が優占する群落ができる。現在ではこの山は，奈良のシカの良い餌場であり，歴史の故郷である奈良盆地を展望できる若草山は，観光客にとって最高の場所である。それだけでなく，この山はどうして森林にならないのか，また，かつてススキ草原はどのように利用されてきたのか，などを学ぶ場所としても捨てがたいところである。

山焼きは自然の仕組みを，巧みに応用した生活の知恵であり，学術・教育的に重要であるばかりではなく，民族資料としての価値も見逃すことはできないし，こういった半自然草原は，それなりに環境保全にも役立っている。したがって，今問題になっているゴルフ場と違って，肥料や農薬の過剰散布を心配する必要はない。

若草山はシカの餌場とするために草原を維持しているわけではないが，草原を維持するためにシカがかかわっていることは見逃せない事実である。シカが嗜好する植物は姿を消し，シカが食べない植物，季節的に喫食する植物，常時喫食しても繁殖力が強い植物のみが残って，特異な草原を作っている。シカがいない草原とすぐさま比較することはできないが，使い方によってはこれもよい教材になる。

さらに，提言者がいっている草原を燃やしたときの二酸化炭素の放出量であるが，燃やさなくても植物はいつかは朽ち果てて炭素に戻る。その時に放出される二酸化炭素の量と，山焼きの時の量とでは，放出する時期の違いこそあれ，量的に大きい違いはない。

以上述べてきたことを無視して，われわれの生活環境としての植生の多様性を維持するという観点からいっても，いろんな植生がある方が楽しい。それだけではなく，植生の多様性はそれぞれの寝ぐらや餌場としている動物たちの多様性につながり，また，それぞれの環境条件を求める植物たちの生活も保証していることになる。極相林から路傍や田畑にみられる雑草群落にいたるまでの多様な環境を保持することこそ大切なのでは無かろうか。